

論文の引用に関する基礎的調査と引用モデルの試案

二通信子

要旨

日本語の論文における引用の実情を把握するために、小規模の分野横断的なパイロット調査を行った。調査では理系・文系合わせて 20 分野の論文 1 編ずつを対象に、引用が行われている位置と引用の方法について調べた。その結果、文系は理系の論文より引用数が多いことに加え、論文のタイプによる違いも明らかになった。具体的には、理系や文系の「実験や調査による検証を目的とした論文（以下、検証型論文）」の場合は、序論と本論での引用が多く間接引用がほとんどであるのに対し、「文献に基づく論述過程に重点を置く論文（以下、論証型論文）」では、本論部分での引用が多く、引用の方法として直接引用も多用され、文献あたりの引用回数も多かった。また、論文における間接引用には複数の段階があることも確認された。今回の調査結果を参考に、日本語の論文の引用方法や形式の枠組みを示すモデルの試案をまとめた。

キーワード

論文における引用の位置、引用の方法、直接引用と間接引用、引用のモデル

1. はじめに

論文作成に取り組む留学生にとって、引用の処理は一つの重要な課題である。文章における引用には、原文をそのまま括弧に入れて示すいわゆる「直接引用」と、引用者が原文を言い換えたり要約したりして自分の文章に取り込む「間接引用」とがある。学術論文の場合には間接引用の中にも様々な形式があり、引用の目的、論文全体の長さ、引用が行われる文脈などによって引用の方法や表現を使い分ける必要がある。さらに引用文の作成においては、文献の正確な読み取り、要点の取り出し、言い換えや要約、自分の文章への組み込みなど、読解から文章作成に至る様々な日本語のスキルが必要になる（二通 2007）。しかし、従来のレポート・論文作成のための教科書は、一般的な引用のルールの説明や文脈と離れた引用文の作成練習などが主になっており、日本語の習得過程にありかつ論文作成の初心者である留学生にとっては、きわめて不十分なものであった。

引用の指導におけるもう一つの問題点として、専門分野や研究手法による差が大きいことが挙げられる。そのため、異なる分野の学生が混在するクラスでは、共通して学習する部分と、学習者自身の意識的な観察に基づく専門分野の実状に合わせた学習とを効果的に組み合わせる必要がある。そのような学習を可能にするためにも、引用についての全体的な状況や分野などによる違いを明らかにし、そうした知見を学習者に分かりやすく提示することが求められている。

筆者は留学生への論文作成指導のための資料を得るために、その第一歩として、引用の位置や引用方法などについての小規模の分野横断的な調査を行った。本稿では「研究ノート」という形でその調査結果を報告するとともに、今回の調査をもとに、論文における引用の方法や形式を概観できるモデルの試案を示したい。

2. 先行研究

学術的な論文における引用の方法や形式に関する研究として、英語の分野では Swales (1986, 1990)、Dubois (1988)、Hyland (1999) などが挙げられる。このうち Hyland (1999) は、文系・理系の 8 分野 80 論文を対象に調査を行い、文系の論文は理系に比べ引用が多く、引用の動詞 (reporting verb) を多用し、論文や資料に対して一定の距離を保ちながら引用を行っていることを報告している。Swales (1986) は引用部分の長さや引用後の議論の有無について、また、Swales (1990) は引用文中の原文の著者名と引用の動詞の有無に着目した調査を行い、専門分野の違いによる引用方法の違いを指摘している。Swales の二つの研究はどれもデータの規模としては小さく、分野の特徴を特定するには至っていない。

日本語の論文における引用に関する研究としては、岩垂・野口・折戸 (2001)、菊池 (2002)、清水 (2008a, 2008b) などがあるが、研究自体が少ないうえに対象とする分野も限定されている。岩垂・野口・折戸 (2001) は化学の分野の論文 231 編を対象に論文中の「引用の意味」と「当該研究とのかかわり」について調査を行い、化学の論文については、「先行・関連研究」と過去の実験により証明された事実を示す「事例提示」とが引用全体の約 9 割を占めていたと報告している。このうち「事例提示」は主として「結果」と「考察」の部分に出現し、当該研究との照合や考察の「サポート材料」として利用されているという (岩垂ほか, 2001, p. 23)。清水 (2008a) では歴史学、教育学、日本語学の 3 分野、さらに清水 (2008b) では日本文学なども加えた文系の 5 分野における引用について調査を行い、原文からの要約による間接引用が多用されていることを指摘している。菊池 (2002) は、科学の分野と人文の分野での文献や引用の役割の違いについて、科学の論文は研究成果を発表する手段であるが、人文の場合は論文自体が研究成果であり、文献の読み方自体が研究となると指摘している。こうした違いが後述するような引用方法や形式の違いにも大きく関係してくると思われる。

3 調査の方法

3. 1 調査対象

今回対象とした論文は、理系、文系の各 10 論文、合計 20 論文である (巻末資料 1)。これらは筆者が過去に収集した論文、および現在進行中のレポート・論文表現集の開発 (二通他 (2008) で報告) にあたって収集した論文から、分野および論文のタイプのバランスを考慮して選択した。選択の基準としては、各分野の主要な学会の学会誌の原著論文であることとし、藤田 (2006, 2007) を参考に分野間のバランスを調整した¹⁾。また、論文のタイプについては二通他 (2008) の「検証型」、「論証型」の分類を踏襲した。二通他 (2008) では、研究手法の違いに着目して「実験・調査などによる検証を目的とした論文 (検証型論文)」と「文献などに基づく論述過程に重点を置く論文 (論証型論文)」の構造の違いを説明している。本稿ではこの二つのタイプを取り上げた。

今回の調査では、検証型が理系 8 編、文系 4 編、論証型が文系 6 編であった。なお、「検証型」論文の中に、「過去のデータによる検証を目的とした論文」(理系 2 編) も加えた。対象とした論文の概要は 4. 1 の表 2 に示す。

3. 2 調査項目

3. 2. 1 引用が行われる位置

引用が「序論」「本論」「結論」のどの部分で行われているかを調べた。論文によって各部分の表示方法や構成要素は異なるが、序論については、「はじめに」「緒言」など序論に該当する部分に加え、「研究の背景」「先行研究」など序論に後接して先行研究に言及している部分も序論部分に含めた（表3参照）。一方、結論に当たる部分がないものが5編あった。その中の2編は要旨で結論を示し、論文本体では考察のみを書く形になっている。なお、1か所に複数の文献を提示している場合は、引用箇所を「1」と計算した。また、今回は文章の中での引用のみを対象とし、図表の出典については引用箇所に含めなかった。

3. 2. 2 引用の方法

本稿では引用を表1のように「直接引用」「間接引用 a」「間接引用 b」の3つに分類し、論文中でのそれぞれの出現数を調べた。間接引用の a、b は、引用を示す表現の有無で分けた。間接引用の一種で事実や他者の意見を直接的な文の形で示すタイプの引用²⁾は「間接引用 b」に入れた。「直接引用」「間接引用 a」「間接引用 b」とも、引用文に著者名を示す場合と、文中に著者名を示さず注の番号（以下、文献番号）によって示す場合とがあるが、今回の調査では両方をまとめて集計した。

表1 引用方法の分類

引用方法	例 文	説 明
直接引用	・(著者)は「……」と指摘する。 ・～は「……」ためである。	原文の一部または全体をそのまま引用している。
間接引用 a	・(著者)は ～と指摘する。 ・(著者)によれば、～という/である。 ・～という説明が行われている。	原文の言い換えや要約を行って引用する。引用を示す動詞や「～によれば」などの引用を示す表現を使っている。
間接引用 b	・～について(著者)の研究がある。 ・～の定義を用いる。 ・～は ～である。	引用を示す表現はないが、文献番号などによって、他者からの情報であることが示されている。

4. 結果と考察

4. 1 調査対象の論文の概要と引用の出現数

表2に、対象とした論文の分野、論文のタイプ、文字数、引用文献数などの概要を示す。表の a～j は理系の分野、1～t は文系の分野からの論文である。表2～4では、文系のうち検証型の論文を薄い網掛けで、論証型の論文を濃い網掛けで示した。

対象とした20論文の引用箇所は合計426カ所であった。論文あたりの引用数は総じて文系が多く、一つの参考文献を複数回引用する場合も多い。例えば、社会学の二つの論文については、文献あたりの平均引用回数がマスコミ論2.6回、ジェンダー論4.4回となっており、文献から複数の関連部分を引用していることがわかる。また、同じ検証型の論文

でも、理系よりも文系のほうが引用文献数は多い傾向にある。調査や実験の位置づけや結果の意義についての説明や議論に多くの引用が行われている。

表 2 調査対象の論文の概要

	専門分野名		論文のタイプ	序論、結論部分の表示*1	文字数	引用箇所 (/1000字)	文献数*2
a	地球科学	理	調査による検証	「はじめに」/「おわりに」	16300	14(0.8)	55
b	建築学	理	調査による検証	「はじめに」/「まとめ」	16200	4(0.2)	8
c	機械工学	理	実験による検証	「緒言」/「結言」	11928	11(0.9)	7
d	電子情報学	理	実験による検証	「まえがき」/「むすび」	12528	9(0.7)	9
e	金属工学	理	実験による検証	「はじめに」/「まとめ」	16978	9(0.5)	4
f	臨床細胞学	理	実験による検証	「はじめに」/ ●	7644	10(1.3)	17
g	健康医学	理	調査による検証	「目的」/ ●	8463	21(2.4)	12
h	水産学	理	実験による検証	(タイトル無し)/ ●	9075	13(0.4)	23
i	造園学	理	既存のデータおよび調査による検証	「研究の背景と目的」/「まとめ」	10584	14(1.3)	15
j	農業経済学	理	既存のデータによる検証	「はじめに」/「小括」	15525	10(0.6)	15
k	教育心理学	文	実験による検証	「問題」/ ●	19128	27(1.4)	31
l	音声学	文	調査による検証	「はじめに」+「研究の背景」 /「結論および今後の課題」	18048	31(1.7)	33
m	情報通信学	文	調査による検証	「序」/「結び」	12840	24(1.8)	23
n	経営学	文	調査による検証	「研究の背景と目的」+「組織コミットメント」(先行研究)/ ●	9280	23(2.4)	16
o	日本文学	文	文献に基づく論証	「序論」/「結論」	12600	31(2.4)	25
p	宗教学	文	文献に基づく論証	「はじめに」/「おわりに」	19431	29(1.4)	15
q	教育哲学	文	文献に基づく論証	★★ / ★★	16380	20(1.2)	15
r	社会学(マスコミ論)	文	文献に基づく論証	★★ / ★★	17205	37(2.2)	14
s	社会学(ジェンダー論)	文	文献に基づく論証	「はじめに」/「おわりに」	16391	61(3.7)	14
t	政治学	文	文献に基づく論証	「はじめに」/「むすびにかえて」	12042	28(2.3)	23

*1 結論の表示の●は独立した結論部分がないこと、★★は内容を示す長いタイトルがついていることを示す。なお、hの論文は序論部分のみタイトル抜きで書かれている。

*2 文献数は各論文の巻末の引用(参考)文献一覧による。

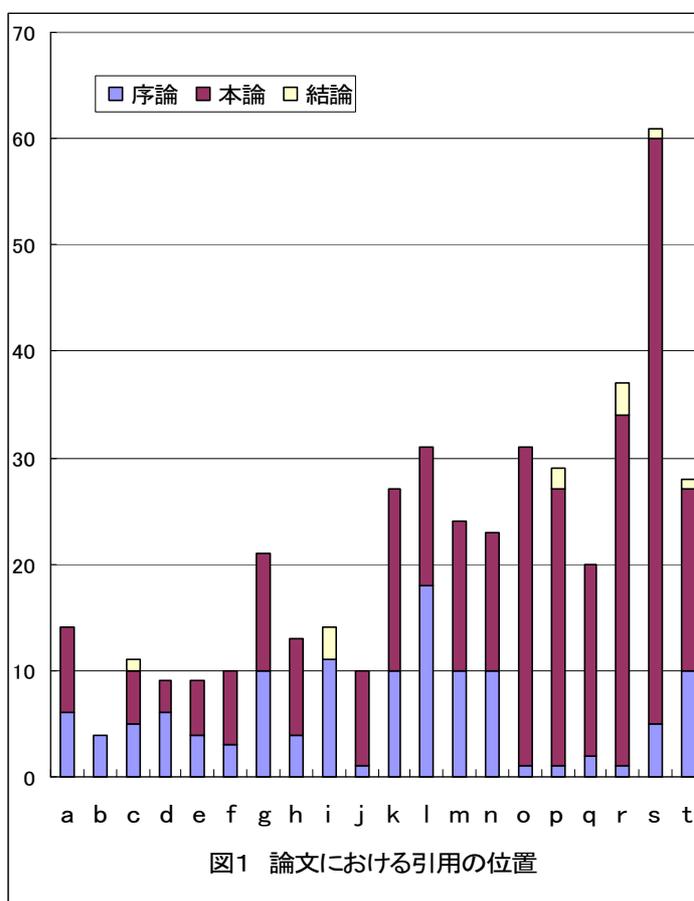
4. 2 引用の行われる位置

表3(図1)に示すように、論文のタイプにより引用の出現位置に違いがある。理系の論文では、序論部分では先行研究の紹介が行われ、本論部分では調査や実験の方法、数式、

結果の分析方法など研究方法に関する引用が行われ、さらに本論の考察部分では調査や実験の結果を過去の研究結果と比較したり評価する場合に引用が行われている。文系でも k ~ n のように検証型論文の場合は、出現数は理系よりも多いものの、引用箇所分布については理系の検証型論文と同じような傾向が見られた。また、文系の検証型では、先行研究の紹介を序論から独立させる場合が多かった (k, l, m)。一方、o ~ t の論証型論文の場合は、序論よりも本論部分での引用が圧倒的に多く、一次資料や参考部分を詳細に取り上げながら考察を進めている。特に i (宗教論)、q (マスコミ論) では、引用の 9 割程度が本論部分に集中している。理系の検証型論文と異なり、序論では問題提起に関わる引用のみが行われ、本論の考察の中でその都度関連する先行研究を取り上げながら議論を進めていくという形になっている。

表 3 論文における引用の位置

	専門分野名	序論	本論	結論	総数
a	地球科学	6	8	0	14
b	建築学	4	0	0	4
c	機械工学	5	5	1	11
d	電子情報学	6	3	0	9
e	金属工学	4	5	0	9
f	臨床細胞学	3	7	/	10
g	健康医学	10	11	/	21
h	水産学	4	9	/	13
i	造園学	11	0	3	14
j	農業経済学	1	9	0	10
k	教育心理学	10*1	17	/	27
l	音声学	18*2	13	0	31
m	情報通信学	10*3	14	0	24
n	経営学	10	13	/	23
o	日本文学	1	30	0	31
p	宗教学	1	26	2	29
q	教育哲学	2	18	0	20
r	マスコミ論	1	33	3	37
s	ジェンダー論	5	55	1	61
t	政治学	10	17	1	28
	合計	122	292	12	426



*1~3 k, l, m の論文では、「先行研究」「研究の背景」などの先行研究に関わる部分を序論部分の後に独立して設けている。今回の調査では、それらも序論部分に含めて計算した。

*4 論文に独立した結論部分がない場合は、結論の欄に斜線を記した。

4. 3 引用の方法

引用方法別の数を表 4 (図 2) に示す。引用の方法に関しては、論文のタイプによる違いが大きい。「直接引用」は、理系では 142 所中 4 カ所、文系の検証型論文でも 105 所

中 5 か所と極めて少ないのに対して、文系の論証型論文では直接引用が比較的多く、少ない場合で 2 割（宗教学）、最も多い場合では 8 割（ジェンダー論）が直接引用であった。文献に基づく論証を行うというこのタイプの論文の性格から当然のことと言える。

理系の検証型論文では該当する研究の存在のみをしめす「間接引用 b」が多用される傾向にある。また、引用の表現を使う場合でも、「～と報告している」のような客観的な表現が多く使われている。一方、文系の論証型論文では、一次資料や参考文献の内容を再解釈したり検討したりする部分を中心になっており、引用数が多く直接引用も多用されている。一つの文献について数段落に渡って言及しているものもある。引用の表現も、「～と厳しい評価をしている」「～と興味深い論考をしている」など書き手の評価を含む多様な引用表現が使われている。

表 4 引用の方法

	専門分野名	直接	間接 a	間接 b	総数
a	地球科学	0	7	7	14
b	建築学	0	0	4	4
c	機械工学	0	0	11	11
d	電子情報	0	3	6	9
e	金属工学	0	4	5	9
f	臨床細胞学	0	0	10	10
g	健康医学	1	14	6	21
h	水産学	0	4	9	13
m	造園学	1	1	12	14
n	農業経済学	2	3	5	10
i	教育心理学	0	11	16	27
j	音声学	0	20	11	31
k	情報通信学	2	11	11	24
l	経営学	3	9	11	23
o	日本文学	17	4	10	31
p	宗教学	7	11	11	29
q	教育哲学	8	5	7	20
r	マスコミ論	21	7	9	37
s	ジェンダー論	51	7	3	61
t	政治学	18	3	7	28
	合計	131	124	171	426

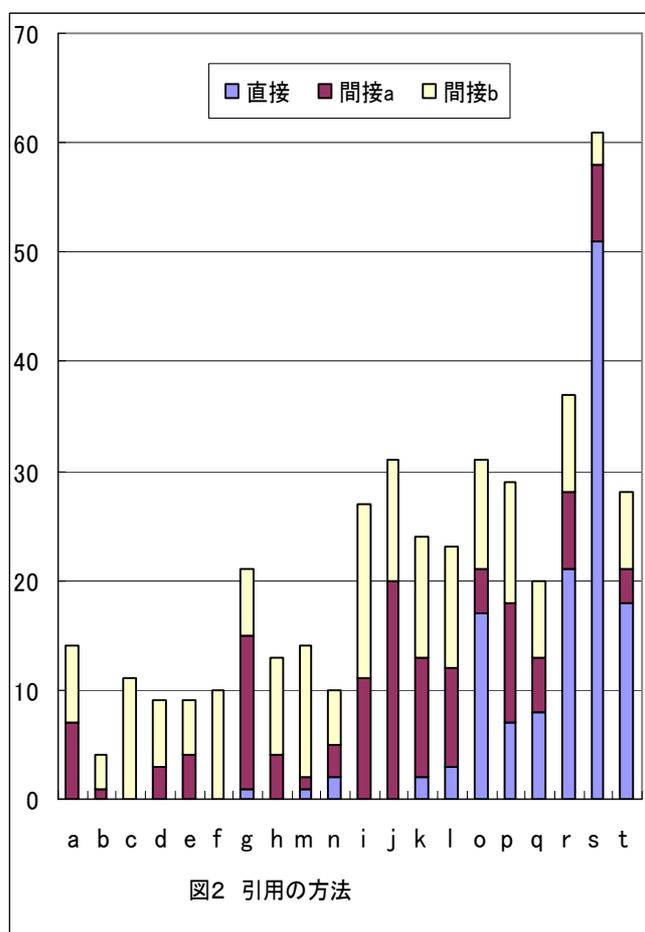


図2 引用の方法

ここで「間接引用」の形式について考えてみたい。表 4（図 2）に示すように、理系・文系に共通して「間接引用 b」が使われている。「間接引用 b」では、下の例のような「事実や他者の意見を直接的な形で記述する文」が使われている（末尾のアルファベットは論文の記号を示す）。

①日本だけでも年間5万人以上が心臓ペースメーカーによる治療を必要とする¹⁾。(e)

- ②半導体製造業界としてもPFC排出量削減のための自主行動宣言を行い、業界を挙げて地球温暖化防止への対応を実施している^{[1][2]}。(d)
- ③こういった目的でインターネットを使用する人はHPを持ちたがり、より能動的な情報活動をしていると考えられる(川浦ほか 1999)。(k)
- ④第一修正をめぐる「なぜ」を問いかける試みは、(中略)当該表現活動に対する憲法上の保護を、「どの程度」、また「どのように」実現していくかを考えるうえで、重要な意味をもっている⁽¹¹⁾。(t)

このタイプの引用文には、上の例のように客観的な事実を述べる文から書き手の考えや評価を示す文まである。その中で上の③～④のような文は<論文の書き手の見解と文献の筆者の見解とを重ね合わせた表現>になっており、「引用」が本来内包している書き手(引用者)と文献との距離が文の形式の上では示されていない。文献番号がなければ、それが他者からの情報に基づくものかどうかは分からない。このような引用文は限られたスペースでデータの出典や意見の裏付けを示すことができる便利な形式ではあるが、書き手と文献との関係が曖昧なままに提示されるという危険性も含んでいる。このタイプの引用文の論文中での使われ方や機能については、稿を改めてさらに検討することとしたい。

5. 引用のモデルの試案

図3 論文における引用のモデル(試案)

		A 著者にフォーカス ←	→ B 事柄にフォーカス*1	
直接引用	引用表現あり	<長い引用—独立した段落で> [著者]は次のように指摘している。	<長い引用—独立した段落で> ～について次のような指摘がある。	引用 ↑
		<短い引用—語や文の切り取り> [著者]は「・・・」(頁)と指摘している。	<短い引用—語や文の切り取り> 「・・・」という指摘がある。	
間接引用	あり	<言い換え、要約> [著者]は～と指摘する。 [著者]によると、～という／～である。	<言い換え、要約> ～と指摘されている。 ～という意見がある。	参照 ↓
		<名詞化>*2 [著者]は～(こと)を明らかにした。 [著者]は～の可能性を示唆している。	<名詞化> ～(こと)が明らかになった。 ～の可能性が示唆されている。	
引用表現なし	なし	<文献の存在の提示> ～については[著者]の研究がある。 [著者]の手法を用いて実験を行った。	<文献の存在の提示> ～についての研究が行われている。 ～法を用いて実験を行った。	
		△	<直接的な文の形> ～は～である。(事実／意見) ～については～と考えられる。	

*1 Bの場合は、文献番号によって出典をしめす。

*2 原文の内容を名詞の形にして自分の引用文に組み込む。

前頁の図3は、今回の調査をもとに論文における引用の方法や形式について整理したものである。今回の調査の「間接引用b」は表5では「引用表現なし」と表示した。このモデルでは、それぞれの方法や形式が全体の中でどのような位置にあるかを示している。

このモデルでは、以下の3つの点に配慮した。まず、表の左右(A・B)の枠で、著者を主題にする文と引用内容を主題にする文との表現形式の違いを示した。ただしこの違いは、文献の筆者と引用内容のフォーカスの当て方に単純化されるものではなく、ディスコースの中でのその引用文の位置や機能も複雑に関係しているものと考えられる。次に、このモデルでは表の上から下に行くにしたがって、形式面では引用文における原文の筆者の存在が希薄になり、論文の文章への統合の度合いが大きくなるように並べた。前述したように、4.2の最後に言及した「直接的な文の形」で行われる引用は、形の上では「参照」に近いが、出典を示している点で引用の範疇に入ると考えられる。さらに、図3では、形式の違いをより明確に示すために、それぞれの引用文の作成の過程で行われている操作を< >で簡単に示した。今後、引用の実状についてさらに調査を行い、今回のモデルにさらに検討を加え、留学生により分かりやすくかつ実態に即した枠組みを提示できるようにしたい。

6. おわりに

今回の調査の結果、同じ文系の論文でも検証型論文と論証型論文とでは、引用の出現位置や引用の方法について違いがあることが観察できた。今回の調査は分野も限られており、データも各1編ずつと極めて少なく、今回の結果からある方向性を示すということはできないが、引用についての指導や今後の研究に向けての手がかりを得ることができた。

最後に、論文における引用の研究課題として次の2点を挙げておきたい。

- 1) 論文の引用の実状を把握するためには、調査対象を広げ、より大きな規模での分野横断的な研究を行う必要がある。そのためには分析の資料となるような明確な選択基準による論文コーパスの作成が求められる。
- 2) 引用文に着目した調査に加え、今後は引用文を含むディスコースの展開について分析を行う必要がある。

論文作成の指導のためには、2)がより緊急性を要する課題であろう。特に論証型の論文において適切で効果的な引用を行うためには、引用したことに解釈や説明を加えそれを根拠として議論を展開していくというようなディスコースの構築が欠かせない。引用文自体は作成できても、それを自分の議論の中に適切かつ有効に生かしていくことが難しいという学習者は多い。引用文を含むディスコースの展開についての研究およびそこに目を向けた指導が必要である。

(二通信子 につう のぶこ・東京大学・nitsu@ic.u-tokyo.ac.jp)

付記

本稿は2006年3月の専門日本語教育学会研究討論集会での発表「論文における引用の効果的な指導をめざして」の内容を土台に、データを追加して作成したものである。

注

1. 藤田 (2006) では国内の科学技術系学会誌 127 学会 199 誌 (和文誌 123 誌)、藤田 (2007) では国内の人文・社会学系 167 学会 172 誌 (和文誌 165 誌) の投稿規定の分析を行っている。前者では半年刊以上の頻度で会誌・論文集を刊行している主要学会を対象とし、後者では 400 人以上の学会員を有し年 2 回以上の会誌類またはそれに準じる会誌類を刊行する学会を対象としている。本稿で調査対象とした論文の 8 割は藤田 (2006、2006) の選定基準で選ばれた学会の学会誌に採録されているものである。
2. 清水 (2008b) では、このタイプの引用を「文全体が間接引用文になっている (p.318)」と説明している。

巻末資料 調査対象となった論文のリスト

- a. 須藤靖明他 (2006) 「阿蘇火山の地殻変動とマグマ溜まり—長時間の変動と圧力言の位置—」『火山』51(5), 291-309
- b. 阿部成治・木内望 (2007) 「住戸規模の地方差とその背景に関する研究—多雪地方と南海地方の比較を中心として—」『日本建築学会計画系論文集』622, 181-186
- c. 佐藤拓他 (2008) 「充電式心臓ペースメーカーを想定した低発熱補接触充電システムの試作」『日本磁気学会誌』32(1), 20-35
- d. 電子情報学：今井伸一他 (1998) 「地球温暖化防止対策ガス C5F8 を用いた高密度プラズマによる酸性膜エッチング特性」『電子情報通信学会論文誌』J81C-11(12), 899-906
- e. 眞山剛他 (2002) 「高温下における銅材の粘塑性変形シュミレーション」『日本機械学会論文集 (A 編)』676, 55-61
- f. 池本健三他 (2005) 「膀胱尿路上皮癌における分子細胞遺伝子学的診断法の検討—Multi-color Fish と DNA ploidy」『日本臨床細胞学雑誌』44(4), 195-200
- g. 陳峻他 (2003) 「広場恐怖を伴うパニック障害患者における一般性セルフ・エフィカシー尺度の特徴に関する検討」『心身医』43(12), 822-821
- h. 遠藤雅人他 (2002) 「微小重力および近赤外光照射下におけるティラピアの姿勢保持」『日本水産学会誌』68(6), 887-892
- i. 加藤麻里子他 (2003) 「地域住民による観光ボランティアガイド活動の実態と動向に関する研究」『ランドスケープ研究』66(5), 799-802
- j. 王雷軒・泉田洋一 (2008) 「農業政策金融機関の補助金依存度—農林金庫の S D I 推計」『農業経済研究』79(4), 181-189
- k. 田島充士・茂呂雄二 (2006) 「科学的概念と日常経験知間の矛盾を解消するための対話を通じた概念理解の検討」『教育心理学研究』54, 12-24
- l. 山本富美子 (2004) 「日本語談話の聴解力と破裂音の知覚との関係—中国北方方言話者と上海方言話者に対する比較調査より—」『音声研究』8(3), 67-79
- m. 斎藤嘉孝・木村忠正 (2005) 「個人ホームページ所有と電子コミュニティの社会文化的際—日本・韓国・フィンランド比較分析—」『情報通信学会誌』23(1), 45-52
- n. 倉谷尚孝・城戸泰彰 (2005) 「行政組織における組織行動のあり方」『経営行動科学学会年次大会：発表論文集』(8), 164-171

- o. 大島丈志 (2003) 「「グスコープドリの伝記」論—1920 から 1930 年代における宮沢賢治の農業思想を背景として—」『日本文学』52(9), 53-63
- p. 宮崎賢太郎 (2003) 「生活宗教としてのキリシタン信仰」『宗教研究』377, 1-26
- q. 西平直 (2001) 「東洋思想と人間形成—井筒俊彦の理論地平から」『教育哲学研究』84, 19-37
- r. 林香里 (2004) 「「オルターナティブ・メディア」は公共的か」, 『マス・コミュニケーション研究』65, 34-51
- s. 川本格子 (2008) 「ジンメルにおける文化と生ならびに性の問題」『社会学評論』58(4), 540-556
- t. 山口いつ子 (2002) 「デフォルトとしての「思想の自由市場」」『法律時報』74 (1), 16-22

参考文献

- ・岩垂司・野口 子・折登一彦 (2001) 「科学論文における引用の分析」『横浜市立大学論叢 自然科学系列』52-1, 2, 21-29,
- ・菊池しづ子 (2002) 「引用論：科学と人文における文献と引用」『学習院女子大学紀要』4, 19-30
- ・清水まさ子 (2008a) 「文系論文における引用文の表現方法」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』14, 1-15
- ・清水まさ子 (2008b) 「専門分野が異なれば引用の方法も異なるのか—5種類の人文系論文を比較して」『第7回日本語教育国際研究大会予稿集』2, 317-320
- ・二通信子 (2007) 「外からの情報を自分の文章にどう組み込んでいくか—アカデミック・ライティングにおける引用の学習—」『2007 年度日本語教育学会春季大会予稿集』283-284
- ・二通信子・大島弥生・因京子・佐藤勢紀子・山本富美子 「論じる行為への理解を進める論文・レポート作成支援表現集の開発」『専門日本語教育』10, 53-58
- ・藤田節子 (2006) 「国内科学技術系学会誌の投稿規定の分析：参照文献の記述、著作権を中心として (II)」『情報管理』49-11, 723-734
- ・藤田節子 (2007) 「国内人文社会科学系学会誌の投稿規定の分析 (II)」『情報管理』49-11, 622-631,
- ・Dubois, B. L. (1988) Citation in Biomedical Journals, *English for Specific Purposes*, 7, 181-193
- ・Hyland, K. (1999) Academic attribution: citation and the construction of disciplinary knowledge, *Applied Linguistics*, 20, No.2, 341-367
- ・Margaret Kantz (1990) Helping students use textual sources persuasively, *College English*, 50-1, 74-91
- ・Swales, J. (1986) Citation analysis and discourse analysis, *Applied Linguistics*, 7-1, 39-57
- ・Swales, J. (1990) *Genre Analysis*, Cambridge University Press